

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 29 日現在

機関番号：34308

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520056

研究課題名(和文) 梵語および梵語・ネワール語混成の写本から見るネパール仏教の特徴について

研究課題名(英文) The Characteristics of Nepalese Buddhism seen from the Sanskrit and Sanskrit-Newari Bilingual Manuscripts

研究代表者

SHAKYA Sudan (Shakya, Sudan)

種智院大学・人文学部・准教授

研究者番号：60447117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：ネパール仏教において、『ナーマサンギーティ』は最も読誦されており、法界語自在マンドラは最も供養されており、na mo va gi sva ra yaは最初に教わる文字であり、そのいずれも『スヴァヤンブー・プラーナ』に登場し、文殊菩薩は核となっている。これがネパール仏教の特徴の一つである。

三宝マンドラ、ジャンク長寿祝賀儀礼、釈尊帰郷図はネパール仏教の代表的な儀礼・図像であるが、その発展の解明にはネパール現存の梵語・ネワール語混成写本なしでは語れない。これらの写本は13世紀にインド仏教が滅んだ後、ネワール文化の影響のもとで製作されている。そのためこれらはネパール仏教を知るための手引きでもある。

研究成果の概要(英文)：In Nepalese Buddhism, the Namasangiti is the most chanted sutra while the Dharmadhatuvagisvara-mandala is the most worshiped mandala. All these appeared in the Svayambhu Purana with a unique combination where Manjusri is the core figure. These facts lead us to consider that the Nepalese Buddhism founded on the deep-rooted faith of Manjusri.

After the Buddhism collapsed in India in the 13C, it is developed in the surrounding countries and regions. And Newar community in Nepal alone is the place where the Sanskrit-based Buddhism is still survive. Thus the Nepalese Buddhism is essential to figure out how it is practiced and given continuity after the 13C. Most of the Sanskrit-Newari Bilingual Manuscripts preserved in Nepal were transcribed within the Kathmandu Valley after the Buddhism disappeared from India. And these manuscripts are not only the sources to reconstruct the Sanskrit original texts, but also the guide to analyze Indian Buddhist influences in the Newar culture.

研究分野：インド・チベット・ネパール仏教

キーワード：ネパール仏教 スヴァヤンブー・プラーナ 梵語・ネワール語混成写本 三宝マンドラ ネパール現存の仏教写本 文殊信仰 ネワール語写本 ジャンク長寿祝賀儀礼

1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマは「**梵語および梵語・ネパール語混成の写本から見るネパール仏教の特徴について**」である。

本研究で取り上げる「ネパール仏教」とは、バハーヤバヒーと呼ばれるカトマンドゥ盆地の仏教寺院を中心に広まっている仏教を指す。これは、インドから伝わった大乘仏教・密教を受け継いだネパールの伝統仏教であり、その担い手は、カトマンドゥ盆地の原住民といわれ、ネパール語（非アーリヤ語）を母語とするネパール人である。

ネパールの仏教寺院では、今日でも種々の宗教儀礼が行われており、多くの仏典類のサンスクリット（梵語）やネパール語などの仏教写本が残されている。これまで、ネパールは仏教の原典であるサンスクリット語写本の宝庫として注目されてきた。近年、ネパールに伝承された種々の仏教儀礼やその担い手となっているネパール人の宗教文化の重要性が認められ、それに関する研究は増えているとはいえ、仏教全般から見ると充分とは言えず、解明すべき点が多く残されている。このような観点から、ネパール仏教の特徴を明らかにすることがそのままインド仏教の特徴を浮き彫りにするのである。

2. 研究の目的

本研究の目的はネパールにおける現地調査とサンスクリット語及びサンスクリット・ネパール語の文献資料の解読を通して、インドから直接伝播してきた「ネパール仏教」の特徴を明らかにすることである。

ネパールにおける写本には、サンスクリット語とともにネパール仏教の担い手であるネパール人の言語、ネパール語（非アーリヤ語）が混成したものが見られる。今日まで写本の研究といえば、仏教原典の搜索を目的としてネパールに存在するサンスクリット語写本の調査・研究を行うのが主流であり、サンスクリット・ネパール語混成の写本の研究

はあまり注目されてこなかった。そこで、本研究では、サンスクリット写本だけではなくサンスクリット・ネパール語混成の写本に焦点を当て、ネパール仏教の特徴について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

以下で示すように、サンスクリット語及びサンスクリット・ネパール語資料の文献研究とネパールにおける宗教儀礼と仏教写本の現地調査を進める。

(1) **文献研究**: 本研究では、ネパール仏教を知る上で欠かせない文献とされる『スヴァヤンブー・プラナ』のサンスクリット語とネパール語の混成写本（ケンブリッジ大学所蔵 Add1469）を中心資料として文献研究を行った。ここには「三宝マンドラ」、「九宝」と共にネパール現在の首都カトマンドゥ盆地の起源に関する伝説などが含まれる。ゆえに、その部分を中心に同文献の解読・翻訳を行うとともにその内容を分析することによりネパール仏教の特徴を明らかにしていく。また、必要に応じてその関連文献の研究も行っていく。

(2) **ネパールでの現地調査（儀礼）**: ネパールの仏教寺院での現地調査を行う。サンスクリット語だけでなくサンスクリット語とネパール語混成の写本を使用してネパール仏教を分析することが本研究の新たな視点である。このような写本類の解読により、インドから伝播した仏教の受容と変容が明らかになり、儀礼に使用する法具の研究を通してネパール仏教の特有の信仰体系も明らかになる。

(3) **ネパールでの現地調査（写本調査）**: ネパール現存の写本調査の対象は特にサンガ（samgha）やグティ（guthi）と称する寺院の組織や個人所有のものとする。地元の有識者への聞き取りと現地調査によって収集した写本類（サンスクリット語およびサンスクリット語・ネパール語混成の写本を含む）法具等の資料の整理と分析を行い、ネパール仏教に関するキー

ワードを抽出する。

4. 研究成果

ネパール仏教の特徴を解明する目的で平成 24 年度から 27 年度までの四年間でサンスクリットやネワール語の種々文献資料の研究及びネパールにおける現地調査を執り行うことができた。そして、その成果の一部を後述の「5. 主な発表論文等」で示すように国内外の学会で発表し、既に論文として掲載された。その他の成果の概要をここでまとめるが、最終的には研究雑誌などを通して公にしていこう。

(1) 文献研究 『スヴァヤンブー・プラーナ』及び関連文献

ネパール仏教の特徴を知る上で最も重要な文献と見なされている『スヴァヤンブー・プラーナ』という文献を中心に文献研究を進めてきた。特に、ケンブリッジ大学所蔵のサンスクリット語とネワール語混成の写本の解読・翻訳をし、内容の分析を進めてきた。その成果の一部を以下で示す。

平成 24 年 9 月、花園大学において開催の「日本佛教学会 2012 年度学術大会」で発表した。論文が『日本佛教学会年報』第 78 号に「文殊菩薩の信仰をめぐる」というテーマで掲載された。

さらに、平成 27 年に陝西師範大学、西安で開催された学会「The Second Silk Road International Festival —Silk Road Culture Forum in Chang'an」に『スヴァヤンブー・プラーナ』に説かれている文殊菩薩の二つの物語を取り上げ、ネパールに現存する文殊信仰を通してネパール仏教の特徴を分析した成果を同学会の論文集に掲載された。

文殊菩薩、『ナーマサンギーティ』、法界語自在マンダラの三者が『スヴァヤンブー・プラーナ』に登場する。『ナーマサンギーティ』はネパールで最も読誦されている經典であり、法界語自在マンダラはネパールで最も供養されているマンダラであり、七つの文字

‘na mo va gī śva rā ya’も最初に教わる文字であり、そのいずれも文殊菩薩が核となっており、これがネパール仏教の特徴の一つとしてあげられる。

(2) ネパールでの現地調査 儀礼の調査

三宝マンダラと三尊形式

ネパール仏教において、三宝帰依には「三宝マンダラ」(triratnamāṇḍala)と呼ばれる三種のマンダラを用いる。本研究において、実際の儀礼次第に使用しているサンスクリット語およびサンスクリット・ネワール語混成の「ニティヤ・カルマ」及び「ヴラタ供養」に関する新たな資料と共に、碑文や図像資料を使用し、三宝マンダラの起源及びそれに由来する三尊形式の図像の典拠を明らかにした。その詳細は「ネパール仏教における三宝帰依と三種のマンダラ」と題して『密教学』第 51 号に出稿した。

三宝(仏法僧)の三種のマンダラと釈迦・般若母・観音の「三尊形式」の図像はネパール仏教の特徴を示す重要な項目であり、法マンダラに由来する「九法」の九つの經典群はネパール仏教の思想の基盤となっている。

ジャンク長寿祝賀儀礼

平均寿命が六十とも七十歳とも言われる地域において、七十七歳以上の長寿は稀である。インド文化圏においては、七十七歳七ヶ月七日目の夜は「死に至る最も恐ろしい夜」とされ「ビーマ・ラタ・ラートリ」もしくは「カーララートリ」と呼ばれる。そのような恐怖の夜を越した長寿者は祝福され「聖なる者」として敬われる。本研究によって、その三種のジャンク儀礼の典拠となっている文献と共に、それぞれに用いるマンダラの構成に明らかにした。その詳細は、「ネパール仏教における長寿祝賀儀礼について」『密教学研究』48 にて発表した。その要点を紹介する。

今回取り上げた長寿者を祝うジャンク儀礼からネパール仏教は、インド仏教を受容しながら独自に発展を遂げていることが明らかである。

ネパール現存の釈尊帰郷図

ネパールにおいては、釈尊が成道された後、カピラヴァストゥ城ではなく、生誕地であるルンビニー園林を訪れた光景を描いた図像が流布している。これはいわゆる「釈尊帰郷の図像」である。さらに、ネパール仏教ではバジャナと呼ばれる神歌があり、これは朝夕に寺院の中で合唱されている。釈尊がルンビニーを訪れた光景もネワール語による「バジャナ」として今日でも広く歌われている。本研究によって、ネパール現存の「釈尊帰郷の図像」の典拠となる文献が明らかになった。その成果は『密教図像』35に掲載された。

(3) ネパールでの現地調査(写本調査)

仏教文献研究においてサンスクリット語の写本は第一次資料であり、学術的価値が高い。一九世紀初頭のネパールの仏教学者アマリターナングからネパールの仏教を学び、後に仏教学者・言語学者として活躍したイギリス外交官B. H. ホジソンはネパールに現存する仏教写本の存在を世界に初めて紹介した。それ以降、ネパールは梵文原典の宝庫として注目されるようになり、滅亡したとされていた仏教の梵文原典が続々と発見されている。

平成27年4月25日と5月12日の二度にわたり、カトマンドゥ盆地を含むネパール中部の山岳地帯の村などを大震災が襲ったことは周知の通りである。この震災は九千人に迫る犠牲者を出し、壊滅的な打撃を与えた。報告者が平成24～26年度の三年間にネパールで進めてきた写本や仏教寺院などの記録は特に貴重資料となり、今後のネパールの復興に貢献できると考える。

ネパールにおける写本調査に協力していただいた所有者たちも被害に遭われ、平成27年度の現地調査も一時中断せざるを得なかった。大震災の約一年後、彼らの家屋も修復が多少進み、写本調査の継続も可能となり、報告者が27年度末の3月に再び調査を実施したところ、その意識に変化が生まれている。これまでの協力者たち以外の所有者からも写本の調

査の依頼を受けるようになったのである。今後ともネパールにおいて写本調査を実施し、写本などの文化財の維持・保存に協力していき、いずれ研究資料と使用できるようにしたいと考えている。

本研究において、平成23から27年度の間に八回にわたりネパールでの現地調査を実施し、ネパール現存の仏教写本の調査も進めることができた。その際、未公開となっている個人及び「サンガ」や「グティ」の組織が所蔵する写本をその対象とした。現状を把握し、可能な限り写本の撮影を行い、その目録化に努めている。全所有者から同意を得た後、公開していく。

報告者はこれまで、ネパール現存で、特に個人所蔵の写本調査を進めて来た。そこから、所蔵写本の傾向も明らかになってきた。特に、個人所有者の中には、僧侶と在家(信者)が存在するが、所有している写本には明らかな違いがみられる。

僧侶所有の場合、儀礼次第に関する文献に加え、経典類やアヴァダナ物語など幅広いジャンルを所有していることが多い。一方、在家所有の場合、儀礼文献はほとんど所蔵することがなく、経典、陀羅尼、アヴァダナ文献などが中心となっている。

儀礼文献のほとんどがヴァジュラーチャーラヤ僧侶家系の所蔵であり、一部の密教に関する写本に関しては取り扱いにおける厳格なルールもあり、門外不出の写本となってもある。それ以外の、個人所蔵の場合、家宝であると同時に信仰の対象となっていることが多いが、比較的調査の許可が取り付けやすい。ネパールにおける仏教写本の調査は安易だとは言いがたい。これまでどおり、いやそれ以上地元伝統、所有者の信仰・意思を尊重しつつ、彼らと共に仏教写本を維持・保存しながら、さらに学術資料として活用していく共同作業が必要と感じる。

ネパール現存のサンスクリット写本の梵文には文法上の誤りがあることが指摘されている。一方、梵語・ネワール語混成写本において

も同様の傾向が見られる。とくに梵語・ネパール語混成写本には訳語や註釈にも誤訳がしばしばみられる。さらに、訳者や註釈者が明記されていない場合もある。そのため、貴重な情報源にも関わらず研究資料として扱うことに課題も残る。ただし、それらの内容を吟味することで、梵文原典がもはや現存しない仏典の原文を回収できる可能性も皆無ではない。また、これらの写本のほとんどは十三世紀にインドで仏教が滅んだ後、ネパール文化の影響のもとで製作されている。そのため、この写本が十三世紀以降のインド仏教の発展体系を研究する一助となることは否めない。何よりも、これらの写本の研究は仏教特にネパール仏教を知るための手引きとなると考える。

ネパール仏教において、とりわけ儀礼は独自の発展を遂げており、それが図像、宗教文化に影響を与えている。そのほとんどの典拠はインド成立の文献に求められる。たとえば、これまで取り上げてきた、三宝マンダラ、長寿祝賀儀礼、釈尊帰郷図はいずれもネパール仏教の代表的な儀礼・図像であるが、その発展の解明はネパール現存の梵語・ネパール語混成資料なしでは語れない。

梵語及び梵語・ネパール語混成写本の膨大な資料の研究は今後も継続する必要がある。特に、始まったばかりの梵語・ネパール語混成資料研究は仏教研究において不可欠であることが本研究によって示せたのではないかと考える。これが今回の研究による一つの成果でもある。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

スダン・シャキヤ「文殊菩薩の信仰をめぐって」『日本佛教学年報』第78号、2013年、pp.47-70

スダン・シャキヤ (Sudan Shakya) 「ネパール現存の梵語・ネパール語混成の密教文献について」『第二回中国密教国際学術研討論文集』第一巻、陝西師範大学宗教研究中心編、2013年、pp.353-368.

スダン・シャキヤ「ネパール仏教における三宝帰依と三種のマンダラ」『密教学』第51号、2014年、pp.211-227.

Shakya Sudan “The Characteristic Aspect of Nepalese Buddhism: Focusing on the Two Stories of Mañjuśrī Bodhisattva Described in the *Svayambhū Purāṇa*” *Proceedings of the Second Silk Road International Festival—Silk Road Culture Forum in Chang’an* Shaanxi Normal University Religious Research Centre (陝西師範大学宗教研究中心編)、Xi’an, 2015.09, pp.177-194.

Shakya Sudan “The Sanskrit-Newari Bilingual Buddhist Manuscript of Nepal: Its Role in the Buddhist Studies” *Journal of Association of Indian and Buddhist Studies*, Vol-64, pp.233-240.

スダン・シャキヤ「ネパール仏教における長寿祝賀儀礼について」『密教学研究』第48号、pp.30-51.

スダン・シャキヤ「ネパール現存の「釈尊帰郷の図像」とその典拠について」『密教図像』第35号、pp.1-16.

[学会発表](計10件)

スダン・シャキヤ「文殊菩薩の信仰をめぐって」日本佛教学会、花園大学(京都)、2012年9月14-15日.

スダン・シャキヤ (Sudan Shakya) 「ネパール現存の梵語・ネパール語混成の密教文献について」第二回中国密教国際学術研討論会、陝西師範大学宗教研究中心(中国)、2013年6月27-29日.

Shakya Sudan “Uṣṇīṣavijayā in the Esoteric Buddhist Texts” Work Shop on Chinese and Tibetan Esoteric Buddhism, The Israel Institute for Advance Studies at The Hebrew University of Jerusalem, (Israel), June 16-18, 2014.

Shakya Sudan “The Concept of Vasundharā and Vasudhārā: Focusing on the Newari Buddhist Literatures” XVIIth Congress of the IABS, University of Vienna (Austria), August 18-23, 2014.

スダン・シャキヤ「ネパール仏教における現代の葬送儀礼」 印度学宗学会公開シンポジウム, 東北大学(仙台)、2015年5月30日

スダン・シャキヤ「ネパールの仏教写本を巡って—近代仏教学における写本研究とその意義」世界仏教文化研究センター設立記念講演会, 龍谷大学(京都)、2015年7月14日

Shakya Sudan “The Characteristic Aspect of Nepalese Buddhism: Focusing on the Two Stories of Mañjuśrī Bodhisattva Described in the *Svayambhū Purāṇa*” The Second Silk Road International Festival —Silk Road Culture Forum in Chang’an, Shaanxi Normal University Religious Research Centre (China), 2015.09.07-08.

Shakya Sudan 「ネパール現存の梵語・ネワール語混成写本について」第66回日本印度学仏教学会学術大会、高野山大学(高野山)、2015年9月19-20日. Shakya Sudan

スダン・シャキヤ「ネパール仏教における長寿祝賀儀礼について」日本密教学会、智山伝法院(東京)、2015年10月30-31日

スダン・シャキヤ「「釈尊帰郷の図像」とその典拠について」密教図像学会、東洋文化財研究所(東京)、2015年12月5-6日.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

スダン・シャキヤ (SHAKYA Sudan)
種智院大学、人文学部仏教学科・准教授
研究者番号：60447117

(2) 研究分担者

(0)

研究者番号：

(3) 連携研究者

(0)

研究者番号：

(4) 研究協力者

(0)